

社長所感（29年2月）

先日、トランプ第45代アメリカ大統領の就任演説を聞きながら、2人の政治家を思い出しました。

一人は、56年前に第35代大統領に就任したケネディ氏で、その就任演説は格調高く、アメリカの理想主義を世界に広めようとするものでした。また、それを行うだけの経済力、軍事力がアメリカにあると思われていた時代でもありました。

それから、50年余りが経ち、トランプ氏の時代になると、経済力が低下、さらに民主主義を世界に広げようとする理想も色褪せましたので、「世界の警察官」という役（アメリカによる世界平和という意味で、パックス・アメリカーナと呼ばれています。）を降り、なりふり構わず、アメリカの国益を追求しようという姿勢に変わってしまいました。

アメリカ・ファーストという言葉が象徴的ですが、要するに『普通の国』になりたいという意図と思われる。

もう一人の政治家は、第二次世界大戦後のイギリスのマクミラン首相で、彼は、英国の誇りを失わずに、陽気に、かつ、紳士的に、大英帝国を解体し、普通の国へと変貌させました。（なお、解体したと言っても、コモン・ウェルス—英連邦—という薄いながらも絆は残っていますし、金融面、情報面では、今も昔日の栄光を失っていません）

マクミラン首相が紳士的であり得たのは、パブリックスクールでのジェントルマン教育によることのほかに、幸運なことに、同じ価値観と文化を持ったアメリカという後継者にバトン（パックス・ブリタニカ⇒パックス・アメリカーナ）を渡すことができたので、粗野にしゃかりきになる必要がなかったからです。

この2人に較べると、トランプ氏は客観情勢が悪すぎるので、「なりふり構わず」、「粗野」にならざるを得ないのではと思われる。

もっとも、それには、トランプ氏の人柄も大きく影響していますが、アメリカ国民の半数の支持を得ていることを考えると、アメリカの国柄自体が変化し、「相手のことを考えて」、「紳士的に対応する」という『ゆとり』を失いつつあるからとも言えます。

話は変わりますが、来る2月5日に、アメリカン・フットボールの優勝決定戦スーパーボールが開催され、全米の注目を集めます。（ちなみに、昨年のスーパーボールの視聴率は49.0%でした。）。その同じ日に、全アメフト選手を対象に、その年、最も慈善事業など社会貢献活動を行った選手が、**man of the year** として表彰されます。

このようにボランティア活動を重視するアメリカと先に述べたようにアメリカ・ファーストで移民などに非寛容になりつつあるアメリカ……大国ゆえになかなか複雑ですね。

このボランティア活動、企業で言えばCSR（企業の社会貢献）活動で、最近、わが国でも、積極的に取り組む企業が増えてきました。もともと助け合いの風土があるわが国では、今後ますますCSR活動重視の方に向かうように思われますが、如何でしょうか。